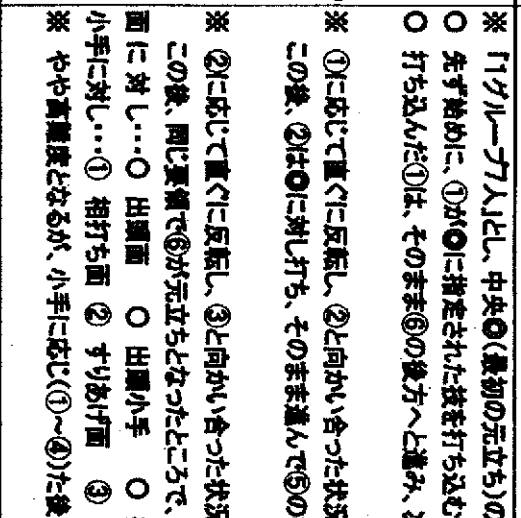
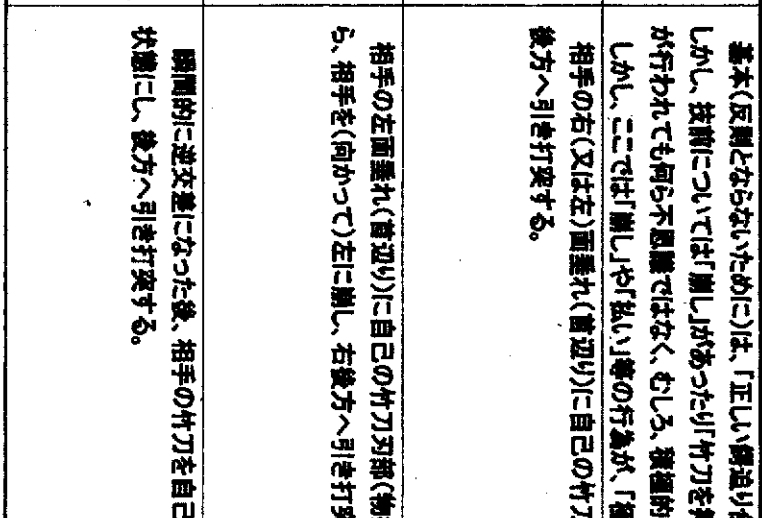


項目	図解	要領等の説明
<技の稽古> 12 連続応じ技 (連続6人掛け)		<p>※ 「1クルーア7人」とし、中央⑥(最初の元立ち)の前後に3人ずつ分かれ、①から順に⑥まで⑥に仕掛けていく。</p> <p>○ 先ず始めに、①が⑥に指定された技を打ち込むので、⑥はこれに反応、直ぐに反転し②と向かい合う。</p> <p>○ 打ち込んだ①は、そのまま⑥の後方へと進み、次(②)に続く元立ち)に備える。</p> <p>※ ①に応じて直ぐに反転し、②と向かい合った状況</p> <p>この後、②は⑥に対し打ち、そのまま進んで⑤の後方へと進む。(②は①が元立ちになったときの1番目となる)</p> <p>※ ②に応じて直ぐに反転し、③と向かい合った状況</p> <p>この後、同じ要領で⑥が元立ちとなったところで、区切り(終了)となる。</p> <p>面に対し...○ 出願面 ○ 出願小手 ○ 抜き面 ○ 返し面</p> <p>小手に対し...① 相打ち面 ② すりあげ面 ③ 返し面 ④ 抜き面</p> <p>※ やや高難度となるが、小手に応じ(①～④)した後、体当たり加え、体を倒して(反転して)「引き面」を打つ。(※ 次の相手に向くように)</p>
13 《引き技》 技の名前はいす 「反転してす 右(左)肩掛け面		<p>※ 大前提</p> <p>基本(反転とならないために)は、「正しい隣通り合い」の状態から出された技かどうかである。</p> <p>しかし、技前については「崩し」があったり「竹刀を舞え」あるいは「竹刀を払う」という状況があることから、隣通り合いからもこういったことが行われても何ら不思議ではなく、むしろ、積極的に行わうべきことである。(昭和初期の映像ではよく見かける。)</p> <p>しかし、ここでは「崩し」や「払い」等の行為が、「極めて瞬間的なものである」という前提の下、技の説明を行うこととする。</p> <p>相手の右(又は左)面垂れ(首送り)に自己の竹刀刃部(物打ち)を掛けたまま、相手側(前)へ舞って、相手との間合いをとり、そのまま後方へ引き打突する。</p> <p>相手の左面垂れ(首送り)に自己の竹刀刃部(物打ち)を掛けると同時に、自己の右足を右横に開き、その右足を軸に体を右に開きながら、相手を(向かって)左に崩し、右後方へ引き打突する。</p> <p>瞬間的に逆交差になった後、相手の竹刀を自己の右面垂れに押し当てる(＝「はさむ」)ようにして体を引き、相手の竹刀を制御不能の状態にし、後方へ引き打突する。</p>
逆押さえ面(又は胴)		